

**\* 国立天文台（東京天文台、緯度観測所）が登場する小説などの収集**

2008年4月に天文情報センターにアーカイブ室を立ち上げ、国立天文台に限らず、残っている天文学に関する歴史的に貴重な観測装置、測定装置、写真乾板、映像記録、その他あらゆる資料の収集を進めている。そんな活動を続けていたところ、観山正見国立天文台長からアーカイブ室長に「国立天文台（東京天文台、緯度観測所）が登場する文学作品（小説など）を収集しろ」というご下命があったと聞いた。そこでアクションを起こし始めているが、まず第1弾として「土星を見るひと」椎名誠著（新潮社）があると聞き、早速入手した（写真1、2）。

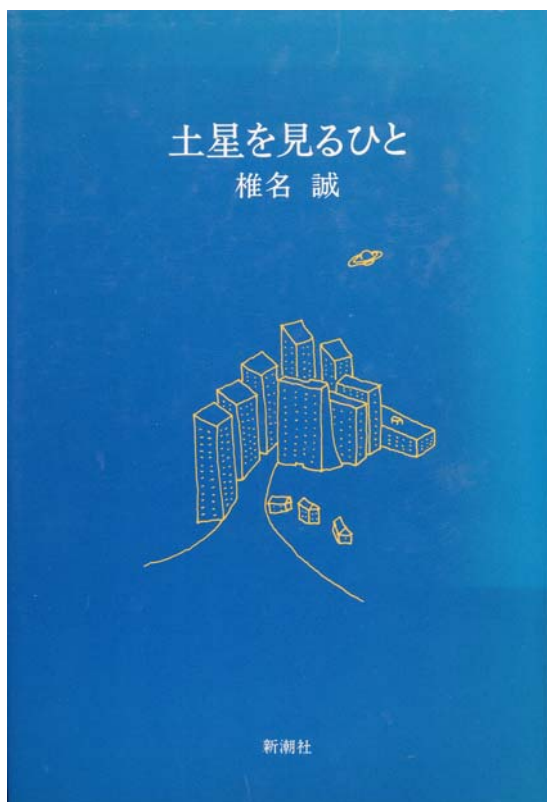


写真1 表表紙



写真2 裏表紙

この本は、短編小説7編が収められたもので、最後の小説が「土星を見るひと」である。目次が写真3である。この小説は、26吋望遠鏡で清田という人が観測する様子取材する話である。清田という人のモデルは12年前に定年退官された畑中至純氏であろう。現在の「すばる」を使った新しい観測とは違って、寒く、そして寒風が吹きぬけるドームの中での観測の様子が描かれている。もっとも26吋望遠鏡は10m以上もある鏡筒が風で揺れるので、風が強い時には観測が出来ない。

目次	
うねり	5
壁の蛇	37
クックタウンの一日	65
栈橋のむこう	91
コッポラコート <small>の私小説</small>	109
ポールド山 <small>に風が吹く</small>	133
土星を見るひと	167
あとがき	226

写真2 目次

この話は、同じころ、三鷹構内の卯酉儀と呼ばれた 30cm 反射望遠鏡で変光星の観測に明け暮れていた筆者には懐かしい話である。畑中さんは土星の衛星の軌道改良の仕事で土星の衛星の写真を撮っておられた。畑中さんの観測スタイルはよく知らないが、ガイド望遠鏡を覗きながら長時間の露出を行っていたのであろう。出始めた「ホッカイロ」を取材者に渡す場面が出てくる

筆者の場合は光電 3 色測光だったから、狭いドームの中を独楽鼠のように動き回りながら、フィルター交換、ゲイン調整、レコーダーへのメモの記入、標準星の観測、変光星への星の交換と寒いなどと言っている暇がない観測であった。冬は夕方 4 時過ぎに官舎に帰り、防寒着を着こんでドームに向かい、夜 9 時～10 時ころ、夕食に帰り、また観測に出かけて朝 7 時ころ官舎に帰って冷たい布団にもぐり、13 時過ぎに起きて朝飯と昼食を兼ねた食事をして天文台に出勤するという生活を 10 年近く続けていた。

その頃は、この小説にも出てくるが、三鷹キャンパスには野犬が 10 匹近く群れていて、夜中ドームに向かう時、襲ってくる危険があった。この野犬は三鷹保健所の手で駆除されて現在に至っているが、構内にはまだ「タヌキ」、「ハクビシン」が生息している。

また三鷹キャンパスの朝の気温は、天気予報で言う東京の最低気温よりほぼ 5 度低く、もっとも寒かった最低気温がマイナス 10 度だったことを覚えている。

さて、国立天文台（東京天文台、緯度観測所）に関係する場面が登場する小説などの情報をお持ちの方もぜひご一報いただければありがたいと思います。このアーカイブ室新聞の読者も増えていることから期待して待っていますのでよろしくご協力ください。